

ブルーギルの池中飼育（予報）

山 田 寛 一

ブルーギル（Blue gill Sunfish, *Lepomis macrochirus*）はサンフィッシュ科の魚で北米を原産としているが現在では各地に分布し、春期に産卵して雄は卵および孵化児を保護する。大きいのは25cmに達し、動物に偏した雑食性であるが餌料不足による矮小形ができてやすいと言われている。¹⁾

ブラックバスとの混養あるいは単独飼育の面から池中養殖向としてサンフィッシュ科中一番有望と考えられている魚でもある。²⁾

本種は1960年に皇太子殿下が渡米された節、シカゴのシェッド水族館から贈呈された4種の淡水魚の中の1種で、10月に到着し、淡水区水産研究所で飼育繁殖している。

当场へは1962年11月当才魚1,000尾を最初として、その後3回にわたり総計2,200尾余りの分与をうけ（第1表）、現在引つづき飼育中であるが、これに関して2、3の知見をえたので、その概要を報告する。

本種の分与を決諾された淡水区水産研究所 中村中六所長はじめ関係者の方々に深く感謝する。

表1表 本県への移殖経過

移殖年度	尾 数	年 令	移殖先
1962, 11	1,000尾	0	当场試験池
1964, 5	200 "	1	"
1964, 11	1,000 "	0	"
1964, 12	42 "	2	"
計	2,242 "		

飼 育 の 方 法

7.4 m × 4.6 m 水深1 m のコンクリート池4面を使用し、それぞれに平均体重70 g, 48 g 5 g, 0.02 g のものを72尾, 70尾, 180尾, 10,000尾収容し、1965年4月1日から同年10月30日まで止水中で飼育した。餌料としては、前3者にはニジマス用完全配合飼料（ペレット）に、魚肝油2%を添加し、1日4回摂餌するだけ投与した。残りのは当初約30日間はミジンコを与え、その後はニジマス餌付用完全飼料（マッシュおよびクランブル）を1日3回摂餌するだけ与えた。

飼育の結果

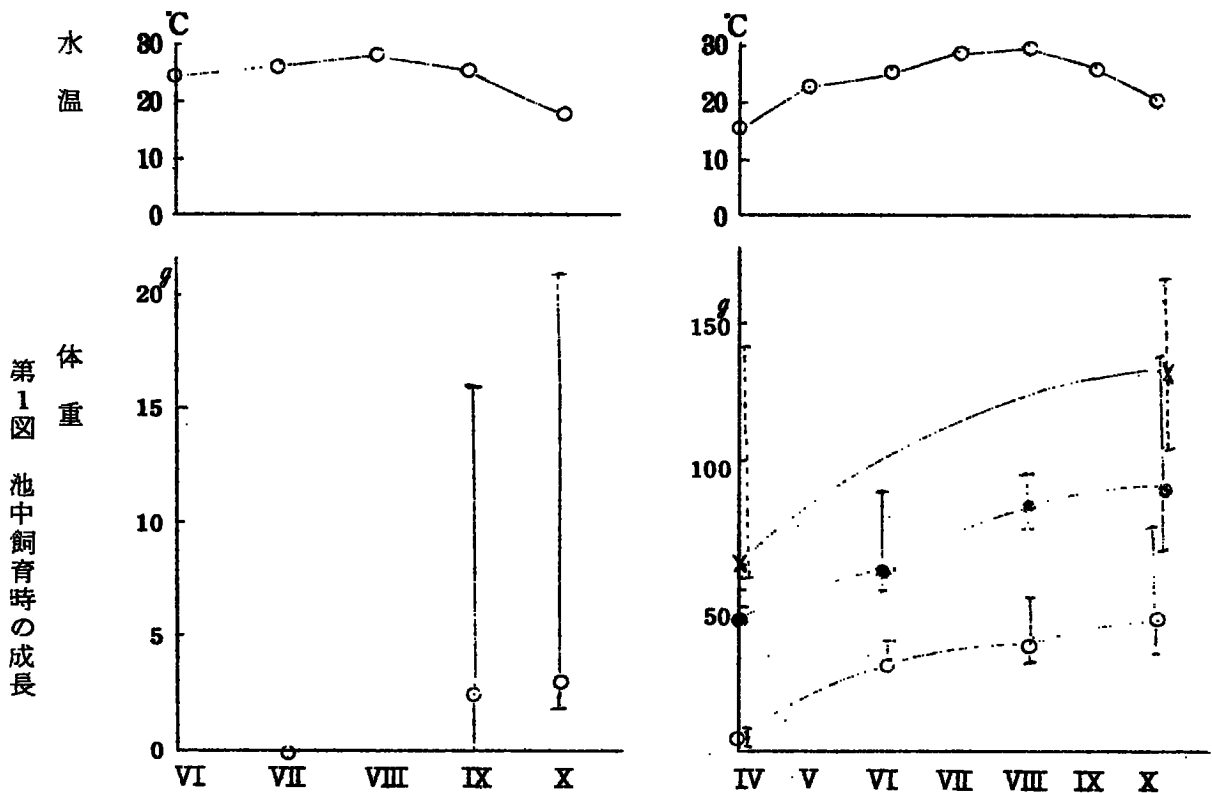
第2表 飼育経過

項目 No	開始時 (X・1)			終了時 (X・30)							
	尾数	平均体重 (g)	総重量 (g)	斃死数	取揚尾数	歩留り (%)	平均体重 (g)	総重量 (g)	総給餌量 (g)	増肉量 (g)	増肉係数
1	72	70	5,040	0	72	100	130	9,360	47,020	4,320	2.2
2	70	48	3,360	6	64	92	90	5,760		2,400	
3	180	5	900	7	173	96	46	7,498		3,898	
4	10,000*	0.02	2,000	6,380	3,620	36%	3	10,860	15,000	8,860	5.9

* 当场試験池で孵化した稚魚

飼育の結果は第2表に示したとおりであって、やはり小形魚は歩どまりが悪かったし増肉係数も大きかった。

飼育魚を随時採集して測定をおこなったが、その結果では当才魚は4ヶ月で1.6~21gで平均3.0gとなり、5gのものは6ヶ月で平均46g、48gのものは92gに、また70gのものは、130gに達するが、特に当才魚においてトビの出現が目立っている(第1図)



第1図 池中飼育時の成長

要 約

淡水区水産研究所から分与をうけたブルーギル、およびそれから得られた同稚魚を池中飼育し次の知見をえた。

1. 完全配合飼料を投与して飼育した結果、当才魚は4カ月で平均39に達するが変異が大きく小形魚は6カ月で9倍、大形魚は2倍に増重し増肉係数は当才魚5.9、その他2.2であった。
2. 6カ月間の飼育の結果大形魚は90%以上の生残を示したが、当才魚では36%の低率であった。

文 献

- 1) 島津忠秀訳：ブルーギルの繁殖，淡水区水産研究所資料，A-2，20～23，(1960)
- 2) ：バス，ブルーギルの混養における放流政策と管理に関する勧告の進展について。淡水区水産研究所資料，A-6，2～14，(1963)